巻き込まれた人間の異世界生活

蒼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
巻き込まれた人間の異世界生活

【Ｎコード】
Ｎ４７１８Ｑ

【作者名】
蒼月

【あらすじ】
兄貴に道連れにされ、迷い込んだ異世界。途中で兄貴とは別れ別れになり、一人生活を余儀なくされたあたしの異世界日記・・ではないがまぁそれに近いかもしれないってことで。６月１７日キーワード追加しました。

Prologue（前書き）

またやっちゃたよ。見切り発車・・・・。

Prologue

眩いほどの光がへたれでクソ兄貴の足元から飛散したと思うと、今度はオドロオドロと効果音がしそうな程の人間（多分）が数人飛び出して来た。そいつらの姿は・・メンドクサイから省くとして、アニキの足にしがみ付き引きずり込む。さながら某映画のサ〇コ状態だ。

「人の中に転生されし、我らが魔王よ！！」

一際大きな身体の男。

「いざ、我らが世界にお戻りを。」

それと対照的な身体の男（多分声が野太いから）

「な、何なんだよ？！　あんたら！！」

ヘタレなりど、どうやら魔王だったあたしの兄貴こと、東雲北斗（しののめほくと）。そしてその光景を我、関せず。と、見ているあたし。東雲華南（しののめかなん）。

「は、放せよッ！！　魔王って一体なんの冗談だよッ！！」

ってか、こんな状態見てるあたしが妙に納得してんのに諦め悪いねぇ。

彼らはそんな兄貴の事などお構いなしに、出て来た時と同様、足元に吸い込まれ始めた。もちろん兄貴も道連れに。足が吸い込まれ始めた兄貴に今生の言葉を向ける。

「恐らくもう会う事も無いだろうか、兄貴のコンポとバイクとそれから・・まぁその他もろもろはあたしが貰っとくから、心置きなく逝って来い。」

「待て待て待てッ！！！　ドサクサに紛れて何言ってんだ？！しかも行って来いの字が逝って来いになってるしッ。なにか？　俺に死ねってか？！」

良く分かってんじゃん。

「その通りだから、さっさと魔界にでも何処でも良いから逝って来い。」

そう言って奴が必死に掴んでいるなんか良く分かんないモノを蹴飛ばした。

「うわっ?！　ちょっと、なに掴むのよッ?！　放せってばッ！！」

「放す・・もんかッ！！　こうなったらお前も道連れにしてやるッ！！」

足を引っ張られた為に重心が崩れて尻餅を付いてしまったあたしは、そのままズルズルと某映画のように引きずり込まれて行った・・・・。

あぁ・・今日の晩飯、特上寿司だったのに・・・

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

すいません。なんか浮かんじゃって書いちゃいました・・・。

1話目

父さん、母さん。兄貴を迎えに来たって言う人の姿をした魔物（魔族？）に、引きずられた兄貴にあたしまで引きずられてしまいこの異世界に来たが、とりあえずあたしは元気にやってます。こちらの世界に来る途中、足蹴にした兄貴と離れてしまい困った事になりましたが、なにやら言葉は通じるらしくとりあえず一人で生計をたてています。幸い下働きを募集していたところがあったので速攻で掛け合いました。（ほぼ腕力にモノを言わせてですが）あ、なんかこの世界に来た時に、チートな能力が付属されたらしくて体力などが2倍から3倍になってた。

「――カナン、ちょっと手をかしてぇ。」

「はいよ、グエンさん。ここが終わったらそっち行きますんで、もうちょっと待ってて下さい。」

今日は何時にもまして屋敷の中がてんてこ舞いです。なんでも国王が先月、通算５９６回目の勇者を召喚したらしく、勇者一行がこの屋敷に滞在するとか何とかでこっちの仕事が一気に増えました。マジ勘弁してくれって感じです。

５９５人の勇者が召喚されたことから察するに、どうやら兄貴に

もあたし同様チートな能力が付いてんのか、はたまた周りのお付の人（魔族）が優秀なのか分からないが兄貴は無事に生を謳歌しているようです。　ちなみに５９５人もの数なんですがどうやらあたしは魔王（兄貴）が出現してから数十年程経って、この異世界に現われたようです。兄貴とはだいぶ時間軸のずれが出来ていました。ええ、なんてたって兄貴が結婚していてしかも自分より年上の甥が居る。（しかも魔族って）マジ勘弁して（さっきも使ったが）

「ごめん、グエンさん。待たせた？」

「ううん、そんなことないよ？」

「じゃ、さっさと始めて終わらせましょうか。」

客室の清掃を終え、最後の仕上げのベッドメイク。

「これが終わったらグエンさんは裏に隠れてね？　表に出てきちゃ駄目だよ？」

「ここに来る前アンヌさんにも言われたわ。」

クスクスと天使のように可愛らしく笑うグエンさん。正式名称は

グルニエール・ハッシュさん。肩甲骨までの緩やかなカールのハニーブロンドの髪と、琥珀色の双瞳（そうぼう）を併せ持つとってもキレイな同僚さん。

「聞いた話によると今回の勇者一行、相当女癖が悪いって言うし、あたしとしてはそんな害虫如くの勇者の目にグエンさんを触れさせたくな「まったく、同感よ。」

「「大奥様？！」」

ニーベングル家の家長である、ラインテッド・オーベン・ニーベングルの母親で実質の屋敷の最高権力者、その人物の登場にびっくりして二人の手が疎かになる。

「私も今回この屋敷に滞在すると聞いた時にははっきり言って、国王の首を絞めてやろうかと思ったわ。」

おいおい、臣下に慕われない王様ってどうよ。

「どちらかって言えば魔王に危機感持つよりも、強敵国のヴェールズに危機感を持って欲しいくらいだわ。」

ポツリと呟く大奥（アントワンヌ）さま。———確かに、そんな話しもちらほら聞

いた。

下町の居酒屋でご機嫌に飲んだくれてた従軍騎士団の・・名前なんだたっけ？　まぁいいや、知らなくても困らないし。まあとにかく、そいつも今は魔族云々よりも国境沿いに進軍して来ているヴェールズに目を向けるべきだ。ってぼやいてたな。

2話目（前書き）

時間的には勇者が召喚される前です。

2話目

「――それは本当か？」

「はい、確かに。西の方から魔王さまとよく似た波動を感じました。そう、あれは以前見知った感覚です。」

「なんで今頃になって・・・いったいなんでだ？」

「おそらく、魔王さまと離れたときに時の歪に引き込まれてしまったのでしょう。どうしますか？　１３師団の誰かにでも連れて来させますか？」

「ああ、そうしてくれ。そうだな。ウィリスがいいだろう。」

「ウィリス、ですか？」

「ああ、そうだ。――――ウィリス。」

名前を呼ぶと目の前の空間が裂け、魔王軍１３黒師団の一人、人

狼のウィリスが姿を現した。ウィリスはワーウルフの族長で最も高貴とされている黒色を纏っている。身長はゆうに2メートルは軽く超し、無駄のない引き締まった身体。そして恐ろしいほど整った顔。

「お呼びですか？　我が主よ。」

片膝をつき臣下の礼をとるウィリス。そんなウィリスに、

「そなたに命じる。我が妹、華南をここへ。」

「仰せのままに、我が主よ――。」

3話目

勇者が屋敷に居座って（滞在して）から、気が付けば1週間が過ぎていた。おい、お前。何の為に召喚されたんだよ。とっとと魔王退治に行けよ。こんなとこでハーレムなんて作ってんな。と、目の前でぼやきたくなるのを我慢しつつ今日も仕事に励むあたしってえらい？　えらいよね？！　けどその忍耐も流石に切れた。

勇者滞在、3週間目。いつもどおり各部屋の掃除を終え勇者の部屋を通り過ぎようとした時、中から物が割れるような凄い音がし、続けて聞き覚えのある声が助けを求めたのが聞こえた。その声が誰のものか分かった途端、勢いよく勇者の部屋のドアを吹き飛ばし（本人普通に開けたつもり）、ベッドに押し倒された女性とその上に圧し掛かる勇者の襟首を掴み、女性の上から引きづり降ろした。

「お、おまえ！　おれは勇者だぞ？！　国王の客人だぞ！！」

なんか訳わかんないことを言い始めた勇者に対し、あたしは仁王立ち、尚且つ腕組までして勇者を睨み付ける。そして一言。

「てめぇみたいな腐れ×××（ピー）と同じ世界から来たなんてやだねぇ。あんたも前の勇者同様魔族に遣られちまいな。」

グエンさんの乱れた服を直して部屋から連れ出す。数刻後、苦虫を噛み潰したような顔で大奥様から解雇（クビ）を宣告された。あの木瓜糞勇者、国王に訴えたらしい。そして国王から大奥様に・・・・仕方なしに大奥様はあたしを解雇した。

許すまじ、糞勇者。心の中で沸々と沸いてくる恨み言を認めるべく、あたしの中にブラックリストが出来上がった・・・。

4話目

異世界の父さん母さん。元気出すかぁ？（そっちとこっちじゃ時間の流れがどうなってるかわからないが、取りあえず生きている事を前提に）あたしは取りあえず元気です。でもそっちから召喚された歩くＲ１８禁男（勇者）のせいでせっかくの職を失ってしまいました。しかもそれだけではなく、慣れ親しんだこの街（王国）ともさよならしなければなりません。これも同じように勇者のせいです。あたしのことを勇者から聞いた国王が、街中にあたしを雇うことを禁じるお触れを出した・・・。

なにかッ？　あたしに餓死しろってかッ？！　働かなけりゃ食って生けねぇだろうが――――ッ！！　と、まぁ心の叫びは置いといて、こんなあたしを哀れに思ってくれた大奥様が退職金を弾んでくれました。えぇもう1年は優に遊んで暮らせるほどの給料を。それと他の国行っても直ぐに仕事が見つかるか分かんないからって、一応、推薦状も。

「――思えば遠くへ来たもんだぁ、と。」

あぁーまじで遠いよ。今まで暮らしていた町並みが小さく見える。あれくらい小さいと人はもう見えないだろうなぁ。あぁーグエンさん大丈夫かなぁ？　心配だなぁ・・またあの歩くＲ１８禁男に襲われてたりしてないよねぇ・・・。一応、元同僚たちにお願いして来

たけど・・・・。

ぐだぐだと考え込んでてもあたしにはもうどうすることも出来ない。ハァーと、諦めのため息をひとつ付くとみすぼらしいマントを翻し、少ない荷物を背負って隣国との境界線である山道を目指した。

5話目

「は？　行方が分からなくなったって？！　何でまた？！」

「オーランド国で召喚した勇者に対して暴挙に出たとか何とかで、国王から国内退去命令に近いものが出たらしいです。」

眉間に出来た皺を伸ばしながら宰相であるクィンシーがウィリスの言葉に続ける。

「現在、行方を探っているところですが。して王よ。如何いたしましょうか？」

「如何も何もそれ相応の報復を。って言いたいところだが、なに、

ほっといていても良いだろう。なにせ国境沿いにヴェールズの軍隊が進軍して来ているからな。あぁ、ただ華南(あいつ)に友好的だった人間は保護しろよ？　あいつはあれで義理堅いからな。」

「分かりました。それでは引き続き華南さまの捜索と「そのカナンと言う女性を何故そんなに必死になって探すんですの？」

突然乱入した女性のその言葉にピシッと音を立てて辺りが凍り付く。もちろん文字通りに、である。女性はにっこり微笑みながら尚且つ、ブリザードを思わせるオーラを纏い、ゆっくりと王座に座る魔王に近づいて行く。そしてそこから動けずに居る魔王はまさに、蛇に睨まれたカエル。である。

「わたくしと言う者が居ながら他の女性を求めるなど・・しかも人間など！」

「ま、待て！　誤解だ！！」

「五階も六階もありませんわ！！」

「って、だから字が違う！！　誤解だ誤解！！　ホントに誤解だ！！！　な？　お前らからも妃に話しをしてくれ！！」

逃げ場を無くし、視線を左右に彷徨わせながら助けを求めるが、今まで一緒に居たはずのクィンシーとウィリスは王妃に向かい一礼すると霞のように掻き消えた。

「さあ、あなた。邪魔者は居なくなった事ですし、ゆっくり話しをしましょうか？」

「あわわわわ・・・・・」

にっこり微笑む王妃。かたや引きつった笑みの魔王・・・・・。

余談だが、明け方近くまで妃に許しを求める魔王の声が続いたとか何とか・・・・・。

6話目

あと少しで国境を越えるっていう所でヴェールズの軍隊が見えた。面倒ごとが嫌いなため回避すべく脇道（獣道）に逸れたのが間違いだった・・・。現在、ヴェールズならぬ追い剥ぎが数人、眼前に立ちはだかっている。

「おい、坊主。命が惜しかったら有り金全て置いてきな。」

お決まりな台詞にお決まりな行動。つまりあたしを剣でもって威嚇している。ちなみにあたしが男に見えるらしい。まぁ少年（こんな）の姿をしている訳だからしょうがないが。取りあえずどうしよう？　やっぱり怯えた方が良いのかな？

「けッ。怯えて声も出ねぇのか？」

なんて考え込んでいるうちに勘違いされたよ。よし、この際。怯えた振りをして逆に持ち物頂いちゃおう。

◇◆◇◆◇◆

「――てめぇそれでも人間かッ？！」

「うるさいなぁ。それでも人間だよ。（異世界のだけどね）それに善悪の判断だって付くし・・・追い剥ぎを追い剥ぎしてどこが悪いの。殺されなかっただけめっけもんじゃん。」

グルグルと簀巻き状態にされた追い剥ぎたちを尻目に、あたしは彼らの荷物を漁る。お、ラッキー。非常食めっけ。後は何があるかなぁ。ガサゴソと荷物を漁るのに夢中で後ろまで近づいていた人の気配に気づかなかった。

「――おまえ、オーランドの人間だな？」

不意にかけられた言葉と同時に振り下ろされた剣。咄嗟のことでセーブ出来ずにチート能力全開で回避してしまったあたしを見て、襲ってきた男のエメラルドグリーンの瞳が驚愕に見開く。

「――おまえが召喚された勇者か？！」

徐に紡がれた言葉に対してあたしは全力で持って拒否る。マジで勘弁してくれ。

「冗談はよしてよ。あんな歩くＲ１８禁男と間違なっつーの！！」

そんなあたしの叫びに近い声に対し、エメラルドグリーンの瞳の男は怪訝な顔をしたが取りあえず抜き身の長剣を鞘にしまうと、人の顔を見はじめた。そりゃぁ穴が開くんじゃないかってくらいマジマジと。

7話目

父さん、母さん。見ず知らずの男に連れて来られて（反論の余地なしに）現在、刺すような視線の真っ只中に居ます。えぇ、右を見ても左を見ても、前や後ろ・・つまり前後左右に囲まれる形でそれぞれに尋問をされています。

「おまえは何者だ？」

とか。

「どこに行こうとしていた？」

とか。

「名前はなんだ？」

とか。

あのさぁ、あたし聖徳太子じゃないんだけど。って言いたくなるが取りあえず我慢する。うん、我慢しよう。チラリと周りの顔を窺（うかが）

う。年の頃は見た感じ似たり寄ったりのような気がする。身長も体格も。髪の色もなんか同じ系統の色だし。茶色？　栗色？　ブラウン？　ってブラウンって茶色だったけ。・・ただ、唯一違いがあるとすれば纏う空気って言うのかオーラって言うのかまぁそんな感じのものがそれぞれ違うんだよね。なんてしみじみ思っていたがいつまでも黙っている訳にはいかないので順番に答えることにした。

「・・あたしはただの旅人です。」

「ただの旅人がそんな規格外な能力持ってる訳ないだろうが。」

一瞬でエメラルドグリーンの瞳の男に否定された。（めんどいんでこれからはグリーンにしよう）

「隣国に行こうとしてただけです。」

「ルマンドの言う通り、そんな危険な能力を持った奴を我が国（ヴェールズ）に入れるわけないだろうッ！！」

あ、やっぱり？　そんな鎧を着てこんな天幕に居るからもしかしたらって思ったけど・・・・やっぱりヴェールズの兵隊？　いや騎士？　まぁどうでもいいけど。てかグリーンの名前ってルマンドって言うんだ。そう言えばそんな感じの名前のお菓子があったなぁ。あれ、すぐボロボロになって食べづらかったけど好きだったんだよ

なぁ。

8話目

「――あたしはカナンって言います。姓はありません。」

ホントはあるけどまた勇者に間違えられるのヤだから黙ってよう。

「姓が無いなんておまえは孤児か？　どこの生まれだ？」

おい、全部答えたのに質問が増えたぞ！

「貴方方のような大国ではなく、地図にも載ってないよう辺鄙な諸島です。」

ってかいい加減開放しろよ。立ちっぱなしは疲れるんだぞ！　それに日が暮れる前に宿屋まで行きたいんだ。野宿はごめんなんだから。

「これが最後の質問だ。なんでオーランドの国王はこんなものを街中に出した？」

目の前に突きつけられた煤けた紙にはあたしの似顔絵と名前。そしてひとこと、この者に衣食住を与えることを禁ずる。

「これはおまえだろう？」

言葉に詰まるあたしを急かすように周りが詰め寄る。だぁー近づくな――ッ！　狭苦しいだろうが――ッ！　離れろーと言いたいのを飲み込み、違うことを口にする。

「あたしが勇者に暴力を振るったからです。」

「なぜ、そんな事をした？」

おい、さっき最後の質問って言ってなかったか？！　なんでまた質問をする？！　しかもなんだ！　その偉そうな態度は！

「・・・なんだその顔は。」

おっといかん。どうやら顔に出ていたらしい。気をつけねば。

「で、なんで勇者にそんな事をしたんだ？」

「知り合いの女性が乱暴されかかっていたんでそれを阻止する為に首根っこ掴んで引っ張りはがしたら、逆恨みされた挙句、有ること無いこと国王に訴えやがった。です。」

「・・なんだその無理やり付けた敬語は。」

「仕方ないでしょうが。人間、誰だって感情が高まったり、切羽詰ればボロが出るでしょうが。」

「確かに。ってかおい。そんなことで国外追放を受けたのか?！」

「そう。人助けして追放なったの。という訳で今夜の寝床と衣食住を確保するためにどっかの国か街に着かないとなんないから、さっさと解放してほしいんですけど。」

9話目

「ろくでもない国王だな。あ、おい。誰か椅子を持って来てやれ。立ちっぱなしは疲れただろう？」

一番偉そうなやつが椅子を勧めてくるので取りあえず腰掛ける。すると周りを囲んでいた男たちもいつの間にか着席していた。

「ええまぁ、確かにろくでもない国王でしたね。Ｒ１８禁男の所業は見て見ぬ振りだし、臣下に慕われてもいなかったし。自分を取り巻く状況（政治的なもの）になんの対策もたててないし。ってか国境近くに進軍して来てたあんたんとこじゃなくて、なにもしてこない魔族に危機感持つってどうよ。」

「俺もそれは思った。いとも簡単に侵略出来るわ勇者はこっちに寝返るわ、ただある一箇所だけは結界かなんか張ってあるらしくてその建物だけは破壊と略奪・・・ごほん、侵略出来なかったな。」

ルマンド、あんたいま思いっきし言い直したよね？　なんだ破壊って。なんだよ略奪って。ってか勇者なに簡単に寝返ってんだよ。お前自分を召喚した国そんな簡単に見捨てんなよッ。

「ねぇ、その結界が張ってあったとこどこ？」

「ああ、君がやって来た方向にある確か・・・」

「サイゼリアン・・？」

「ああ、そう。そんな名前だったよ、確か。」

「えぇ、サイゼリアンにある貴族の館です。それとなぜかその館で働いている人間に危害を加えようとすると結界に憚られるんですよ。なんででしょうね？」

おい、こっち見んな。なんだよその視線。ってか近づいてくんなよ。まるであたしがなんかしてるようじゃないか。確かにチートな能力持ってるけどそんな結界なんて出来ないよ。

ジリジリとなぜか近づく男に若干引き気味になるあたし。

「まぁ取りあえず、このオーランドは俺たちの軍が抑えた。だから別にこの国を出て行かなくてもいいが、どうする？」

目の前に座る偉そうな男が聞く。それつまり、あたしにこの先ど

うするか決めろ。てことよね？　他の国に行くかそれとも戻るか・・・。うーん、どうしようかなぁ。

「うん、あれだ。グエンさんの様子も気になるし、一度街に戻って見るよ。」

「そうか分かった。俺たちも用事があるからちょうどいい。一緒に乗せて行ってやるよ。」

「そうだな。それがいい。」

あぁそうだ。もう一つ気になってたことがあったんだ。そのこともついでに聞いておこう。

「ねぇ、寝返った勇者って今どこに居るの？」

１０話目

なんでもＲ１８禁男は現在、ヴェールズの王宮深くに魔法によって飛ばされたらしい。そこは四方を頑丈な壁に囲まれ、中や外からからのどんな衝撃や魔法にも耐るすばらしい個室だそうだ。何のことはない。とどのつまりが牢屋である。まぁなぜ捕まったのかは容易に想像できる為、あえて聞きはしなかったが。それよりも・・・・

「なぜ、付いてくる？！」

後ろからカッポカッポと蹄の音があたしの歩く速度に合わせ耳に入る。しかも４頭って・・・・・

「別におまえの後を付いて行ってる訳ではない。我々はこの先の屋敷に住んでいる貴族に用事があるだけだ。」

先頭に居る男・・・名が分からんから男Ａにしとこう。にとっと先行けよ！！　と突っ込みたいところだがよくよく考えて見る。そう、よく考えろ自分！　この先に貴族の屋敷は何棟ある？　ち、ち、ち、ちーん！　答えは１棟だ！　って　自問自答してる場合じゃない！！　１棟しかないってことはあたしと行き先が同じだと言うことだ。それはつまり・・・・

「あんたら、ニーベングル家に何の用なのさ?!」

１０話目（後書き）

やっぱり短くなっちゃった・・・・。

11話目

ダディー&マミー（なんとなく気分で）ミー（これも気分で）がお屋敷をお暇したのは3日前。国境について直ぐに盗賊と出会いました。ええもちろん話し合い（暴力的に）をし無事解決。その後、隣国の侵略軍と出会いその人たちのテントに招待され（無理やり連れて行かれ）話しをしたところ（脅されながら）納得してもらいました。そして国王が捕まり、自国に戻っても大丈夫だと教えられていったん戻ることにしました。親切（？）なことに途中まで乗せてくれるという事で、街の入り口まで馬に乗せてもらいそこで別れるはずだったがなんと！　行き先が一緒でした！！　そして現在、再び戻って来ましたこの屋敷。しかも！　街の中には多少なりとも戦った跡があったのにここ、ニーベングル家だけはなんか違う。そう、どう違うかというと、

「うぉ？！　なんだこれ？！」

グルッと屋敷の周りを囲むように出来上がっている円を見て馬上の男Bが吃驚するほどです。

「これってなんでこうなってんの？」

分からないときは素直に聞く。うん、これ大事なことだよね？

つーことで教えて、で〇じろーせんせー！　て、ここにはいないけど。

「これは結界に弾かれたあとだな。」

で〇じろーせんせーの変わりに、馬から降りた男Ａがあたしに近づきながら教えてくれる。

「結界？」

「そうだ。物理攻撃や魔術で弾き返した場合、こんな感じであとが残る。この屋敷にグルッと結界が張られていたんだろう。それにこの結界、残りの魔力から感じるに魔族のものだな。」

「なんで魔族が結界なんて張るんだ？」

首を捻りながら男Ｂ。うん、可愛くない。男Ｂから視線を逸らし中の様子を見ようとしたあたしの耳に、懐かしい声が聞こえた。懐かしさで思わず顔がゆっくりと綻ぶ。そんなあたしの顔を見て驚愕する男たちを無視しながら、

「グエンさーん！　ただいまー？」

「もうカナンったら、なんで疑問系になるの？」

くすくすと楽しそうに笑うグエンさん。そんなグエンさんを見て、あぁ、無事だんたんだーと安堵の息をもらす。

12話目

グエンさんと感動の再開！　そして熱い抱擁！　互いの近況を語り合うべく使用人用の出入り口に体を向けて足を踏み出した。数歩歩いたところで足元に急に影が差し、その影にそって顔を上げる。視界に入ったのは見目麗しき美女。髪は肩までの長さでボブカット。ちなみに髪の色は紫紺。はい、どう見てもこんな髪の色の人間はこの世界ど言えどいないと思います。

着ている服はチャイナドレスによく似たデザインで、豊満なバストと括れた腰を強調し、尚且つ、両側の太腿まで深くスリットが入ってる。そして歩くたびにそのスリットから白く陶磁のような素足が現れ、この場にいる男とたちの注意を引く。そう、男たちの視線はその美女に釘付け。（特にバストとスリットから覗く素足に）なのにその美女の視線はあたしに向いている。

あれ？　なんかいやな感じがするんだけど・・・

「お初にお目にかかります。華南さま。わたくしは貴妃さまに使える八部衆がひとり。名を一座と申します。」

深々と頭を垂れながら鈴を転がすような声で自分の事を述べる一座。顔を挙げてこちらに向けた視線には一瞬だけど、殺意が込めら

れていた。

あれ？　気のせいかなぁ？

「・・あ、ども。はじめまし――――。」

「貴妃さまの命によりあなたさまのお命、頂戴いたします。」

は？！　え？！　なに？！　ってか、さっきの殺気は気のせいじゃなかったんだ！！

「おまえ、なにしでかしたんだ？！」

今にも掴み掛かるような勢いであたしに聞く男A。おまけにグエンさんはさり気なく男Bにエスコートされる様にこの場から退場してるし・・・グエンさん。カムバーック！　まだ話しが終わってないよ――！

そんなあたしを嘲笑うかのように鼻を鳴らす男B。ええ、遠くてもあんたが鳴らした鼻の音はこの耳にしっかり届きましたよ。ムカつく。マジムカつく。ここはひとつ、日本古来よりの仕返しの方法で――――なんて考え込んでいたら地を割く衝撃で我に返った。一座が見えない風であたしの目の前の大地を抉ったのだ。

「偉大にして崇高な我らが王――その王がたかが人間を捜し求めるなんて・・・そんなことのせいで貴妃さまは嘆き、心の中は悲しみで溢れてしまいました。けど、そんな貴妃さまが遂にその目障りなモノを片付ける気になって下さいました。しかもその栄えある任務はこの一座に――」

ウットリと語る一座に若干引きつつも、気になった点を解決するべく疑問を述べる。

「あのさぁ、偉大にして崇高な王って、誰？」

「あの女は魔族だ。おまえなら必然的に答えを導かせられるだろう・・・・。」

「魔族って・・・・じゃあ貴妃ってのはその人の奥さん？」

「なんか、答えをはぐらかしてるような気もするが・・・まあそうだな。貴妃と言うのは名前ではなく尊い女性を表す言葉だからその女性は間違いなく・・・・」

あぁ、なんか考えたくないけど、間違いなくこんなメンドクサイ状況に陥ったのはあいつのせい。そう、クソで、へたれで、あたし

をこの世界に巻き込んだ、あの・・・・あの・・・！！

「あんのクソ兄貴ッ！！　てめえの女房（おんな）の手綱くらいキチッと握っておけってんだッ！！　クソへたれヤロウがッ！！　てかなに？　なんでいまさらあたしを探すわけ？！　意味わかんねぇつーの！！」

というよりも周りのやつら（俺を含めて）の方が意味がわからないと思うのだが・・・・そんな思いを心にはせる男Ａであった。

13話目

愉悦に顔を綻ばせながらあたしに向かって真空(カマイタチ)の刃を繰り出す一座。ひとつ、ふたつ。はたまたみっつ。と、そんな感じで出されたそれを何とか避けようとするが、完全に避け切ることが出来ずに鮮血が空中に舞う。頬や腕、脇腹など、その他数ヶ所に傷を負いながらも一座の間合いに入るべく前進するあたしと、なぜか同じように突進する男A。阿吽の呼吸で男Aの攻撃の後、空いた一座の無防備な間合いに入り込み、回し蹴りを繰り出す。あいにくとこちとら刃物を持っていない為接近戦は力業だ。まぁそれでもチート能力全開な為、結構なダメージを相手に与えることは出来る。が、しょせんは人間と魔族。力の差は歴然としていた。

「これが最後の攻撃です。この攻撃からは逃れることは出来ません。」

ピシピシという嫌な感じの音と共に巻き上げられた風はほんの数秒だけ静まった後、数多の槍となって縦横無尽に襲い掛かる。次々に来る真空(カマイタチ)の刃に男Aが自分の体を楯にしてあたしを庇おうとしたがそれよりも早く、ひとつの影が一座とあたしの間に現れ、片手を翳しただけで数多の槍を一瞬のうちに霧散させた。

「・・・なぜ貴方が?!」

驚愕の声を上げたのは一座。明らかに動揺しているようで挙動不審になっている。一座が敬語を使うところを見るとどうやら上位の魔族のようだ。って貴妃に仕える八部衆より偉いやつなんているのか？　そして事態を飲み込めていないあたしと男Ａを無視して二人は会話を続ける。

「なぜって？　そりゃ？叔母？が見つかったなんて知ったら、？甥？としては是が非でも会ってみたいと思うものだろう？　違うか？　一座。」

「アバドンさま。その？叔母？というのはいったい・・・」

「早とちりの我が母上どのは、父上が探していた人間の女を恋敵と認識したのさ。まったく父上もこそこそ探さずに、さっさと母上に事情を話していればこんな事にはならなかっただろうに。」

いまだ混乱したままの一座と男Ａ。そして嫌々ながらも脳が事情を把握し始めたあたしは、目の前に立つ男の顔をしみじみと見る。――あぁやっぱり・・認めたくはないが・・・非常に認めたくはないんだけど！　確かにあいつと似てるとこが見て取れる。しかもやっぱり年上で・・・・・・・あれ？　おかしいなぁ、なんか涙が出て来るよ・・・・。え？　違うよ。嬉しいからって訳でもないよ？　どちらかって言えば年上の人間に？叔母さん？なんて呼ばれる方が・・・・。

１４話目（前書き）

お待たせしました！

14話目

「甥――――ッ？！」

父さん母さん、聞こえたとは思いませんが、そうです甥です。くそ兄貴の子供の登場です。（ええ、しかも年上だ。なにが悲しくて年上の男に叔母なんて呼ばれなけりゃなんないんだ？！）

一際大きな叫び声を上げた後、驚愕した顔であたしと突如現われた魔族の男の顔を交互に見る男A。一座は一座で地面にガクッと蹲ると捨てられた女よろしく、顔を覆い隠しながらさめざめ泣き出した。なにか？　どこかの劇団員か？　ってなくらいに泣き真似をする一座に遠い目をするあたしと魔族の男（決して甥なんて呼んでやるもんか）あたしたちが相手をしないもんだからかどうかは分からないが、一座はいい加減泣き真似も厭きてきたのか急に泣き止み、スクっと立ち上がると再びあたしに向き合う形で立ちはだかった。

「――数々のご無礼、御許しください。先ほども名乗りましたが私は貴妃さまに仕える八部衆がうちの一人、名を一座。と申します。恐れながら貴方さまのお名前（本来の名前）をお聞きしても宜しいでしょうか？」

深々と、頭を垂れながらあたしの名前を聞いてくる一座に仕方な

しに答える。すると今度は弾かれたように頭を上げ、目が毀れるんじゃないかと思うほど見開きこっちを凝視する。

今度はなによ・・・。内心、うんざりしながらも、決して顔には出さずに何らかのアクションを待つのだが一行におきない・・・。

この状態のままどれくらい時がたったか定かではないが、いい加減その沈黙に耐え切れなくなった男Ａが突然ガシガシと、頭を掻き毟りだした。そしてあたしに指を突きつけ唸るように怒鳴る。

「５０文字以内で簡潔に話せ！」

「無理。」

間髪いれずに答えるあたしを睨み付けるが無理なものは無理。どうやっても５０文字以内で説明なんて出来やしない。そもそも、こっちの世界に出て来たのは最近だし。ましてこの突如現れた甥の名前すら知らないってのに・・・・。

そして気が付くとあたしは盛大にため息を付いていたらしく、周りの視線が効果音を伴いながら突き刺さる。まぁ、その中で一人だけ飄々としているのが自称―甥。（自称もなにもホントに甥なんだが）その甥があたしに近づきつつ、なにやら代わりに話し始めた。

？異世界で暮らしていた兄が実は魔王の転生者で、その兄を迎えに来た魔族の帰還に巻き込まれ、異次元空間に引き込まれた？と。？そしてその空間内で兄たちと離れてしまい、しばしその中を漂う羽目になり、やっとごく最近この世界に出現した？と。――てかなんであんたそんなに詳しく知ってんの？！　まるで見ていたように言う自称、甥に若干引きつつも、改めて顔を見る。

１５話目

Ｄｅａｒ、父さん、母さん。あなたたちの孫は兄貴と親子だけあって似ています。でも、全体的にこっちの方がいい男です。身長は１８５ｃｍ前後で無造作に伸ばされた黒髪に切れ長の紅い瞳。口元から覗くは牙のような犬歯。いや？　犬歯のような牙なのか？　まぁなんにしてもひどくイケメンです。きっと魔界でもモテモテなんでしょう。名前は――なんだっけ？

「――俺の名はアバドン。お前の兄にして魔国の統治者であるジーナンと夜の魔女にして
后妃であるリリスとの間に産まれし第１子。」

どうやら思考回路が読めるらしいです。でも兄貴の名がジーナン？　なんかマヌケ。てかなんであたしお前呼ばわりされるわけ？

「俺のほうが年上だからな。」

あー、はいはいそうですか。もういいや。あえて突っ込みは入れないでおこう。それよりも気になることが出来た。それはあたしを殺しに来た八部衆なるものだ。八部衆言うくらいなんだからやっぱり８人居るんだろうか？　とか、なんか改めて見た一座に、とんでもないものを見つけたような・・・とか。

「――確かに八部衆は8人居る。名は順に、一座(いちざ)、二葉(ふたば)、三輪(みわ)、四門(しもん)、五目(ごもく)、六堂(りくどう)、七飯(ななえ)、八尾(やお)。あとは、まぁお前が見たとおり一座には付いている・・・。」

あ、やっぱり？　見間違いじゃぁなかったのね。一座の豊満だったバスとが急に萎んだようになり、変わりに下半身になんか膨らんだものが・・・・。駄目だ。これ以上見ていたら目がくさる。（いや、実際くさりはしないけど、精神的になんか・・・）

「・・お前は勇者と同じ異世界人だったんだな。」

「あんな勇者と同じ世界から来たなんて自分で認めたくなかったんだよ。」

「確かに・・・・。それはそうと、これからお前はどうするつもりなんだ？」

「このまま普通に生活していくけど・・って、　え？！　ひょっとして同じように生活して行くことって出来ないの？！」

「変わらずに生活していく事は「出来ないね。」

男Ａの言葉に続けるようにアバドンが遮る。まるで見えない壁に寄りかかるようにして腕を組み、長い足を交差している姿なだけなのに、酷く扇情的なのは何でだろうか・・・。まぁそんなアバドンを見据えながら、あたしはなぜ変わらない生活をする事が出来ないのかを聞く。返ってきた言葉に再び罵詈雑言を吐いたのはいた仕方ない事だろう。なぜなら・・・・クソ兄貴があたしを魔国へ連行（？）させる気で居たからだ！！　そしてそんな兄貴に罵詈雑言を吐いた兵はもう一人居た。それはなんと！！！

「カナンは我が国で客人として迎え入れる為、貴殿にはお帰り願おうか。」

男Ａ、改め。ヴェールズ公国の公子にしてその大群を率いる軍神（マルス）。そして第１王位継承者。ルーファス・ジオ・ヴェールズであった・・・。

16話目

当の人間を無視しながらアバドンとルーファスが押し問答を繰り広げている。俺が俺がと言い会う姿を見ながら思ったことはただ一つ。

――あたしいなくてもよくね？　なんか　あたし抜きで話しが進もうとしてるし、それにほらあたしってば一応ケガ人だし、グエンさんに手当てしてもら・・・・

何気なく傷を負った箇所に目を向けたがすぐさま逸らす。こころもと、自分でも遠い目をしてるのが分かる。

あぁー、父さん母さん。どうやらチート能力はもう一個あったようです。現在進行形で流れていたはずの血が止まっており、さらに皮膚が修復されつつあります。つまり治癒能力が数倍上がっています。えぇ、あがってるだけだと自分に言い聞かせますとも！！　これ以上ややこしい能力なんて・・・まぁ、その、なんだが、役に立つものは措いといて、言いたい事はあれだ。これ以上チート能力は要らない。うん、これだ。

悶々と考え事をしながら決着の付かない二人を無視して（あ、後、今現在男性化した一座も）あたしは屋敷に向かう。

「あ、こら！　お前どこ行く気だ？！」

「どこってもちろんグエンさんのとこだよ。さっき邪魔されたから今度こそハグ&近況を語り合いに・・・って、なにこれ？！　なんなのこの手は？！　あんたなにしてんの？！」

3人を通り過ぎようとしたところで突然掻っ攫われた。ええ、もうまるで幼子のように意図も容易くあたしの意思を無視して掻っ攫わる。あんたは誘拐犯か！？　そうアドバンに突っ込みを入れたくなるのが心情と言うものだ。しかもお姫さま抱っこではなく、俵を担ぐように肩にあたしのお腹を載せる。その状態から脱出するべくもがくが、アバドンの力強い腕でも持って押さえつけられているため無理だった。挙句の果てにアバドンの手が・・・・・

「お、お前どこ触ってるんだ？！」

「尻。」

うろたえるルーファスに簡潔に答えるはもちろん、アバドン。しかもさわさわと人のお尻を撫でながらだ。あんた、いったい何がしたいのよ。なんて冷静に心の中で突っ込みを入れるが、いやまてよ？　ここは女の子らしく『いやーん、エッチ』なんて言った方がいいのか？

「ふむ、安産型だな。」

思考を無視して聞こえる声＋お尻を鷲掴みにする男＝芽生える感情は紛れもなく殺意。の式が瞬く間に頭の中に成立する。蹴っていい？　蹴っていいよね？！　こう抉るように蹴ってもいいよね！！　って蹴れないし！！！！！　じゃあどうする？！　殴る？！　こう頭殴ってて・・・あぁ――ッ？！　殴るにも手が届かないッ！？

ジタバタとアバドンの上でのたうつあたしの耳にハッキリ言って、とても耳障りな笑い声がッ――――！！！！　そう、堪えきれずに体を震わせながら笑ってるのは誘拐犯（アバドン）で、そのアバドンに更に殺意が沸くのは否めない！　と、激しく思うあたしの心情を誰か酌んでくれ――――ッ！！

17話目

「――アントワンヌ様、菓子のお味はいかがですか？」

「そうね。甘すぎず、口当たりもサッパリしてて丁度いいわ。」

「然様ですか。ところでアバドン様、紅茶のお替りはいかがですか？」

「ああ、貰おう。」

「ルーファス様もいかがです？」

「ああ・・・。」

アバドンとルーファス。そして女主人であるアントワンヌ様とグエンさんが、先程からこのやり取りを何度も何度も繰り返している。まったくだれもそこから先に進めない。あんたらは壊れたレコードプレーヤーかッ！？

「――そう言えばルーファス。あんた、アントワンヌ様に用があ

るんじゃなかったっけ？」

堪りかねたあたしは無理やりルーファスに話しを振るのだが、なぜかルーファスが目に見えてホッとした。そのルーファスに相反してアバドンが不機嫌になる。――なぜだッ？！

「これ、カナン。隣国の王子を呼び捨てにするなど、あってはならないことです。えぇ、いつもいつも思うのですが、あなたには王族を敬う気持ちがあるんですか？」

優雅に紅茶を飲んでいたアントワンヌ様からあたしは叱責を受ける。けどアントワンヌ様。自国の王に対してあたし並に敬う気持ちがありませんでしたよね？　それにあたしって元々こっちの世界の人間じゃないから、王族を敬うなんて出来ないです。て言うか無理。まず敬う気持ちが湧かない。

「まぁまぁ、アントワンヌ殿。別に私はかまいませんよ？　むしろ親しみを込めて、名で呼んで頂きたいですね。」

アントワンヌ様ににっこり微笑みかけるこいつは誰？　あんた、あたしと話してたとき自分のこと俺って呼んでなかった？

「ああ、そうだな。俺も出来れば親しみを込めてあなたを呼びたいですね。ねぇ――　叔母上？」

こいつはこいつで優雅に紅茶を飲みながら、さほど大した事はないという感じで爆弾を投下する。

はい、アバドンによって大型爆弾が投下されました。被害は主にアントワンヌ様とグエンさんに広がっています。二人はまだ衝撃の余波でこちら側にもどって・・・

「と言うことはカナンは魔族なのね。」

戻ってきました！　グエンさん、逸早いお帰りで！！　じゃなくて、突っ込むとかはそこなの？！　叔母云々はスルー？！　いや、確かにグエンさんは偶にどっか抜けてるとこあるけどッ！！　でもね？　でもね？！

「カナン。あなたがアバドン王子の叔母と言うことは、魔王か皇妃の妹なんですか？」

アントワンヌ様も戻ってきました。――質問付きで。

18話目

父さん母さん、お久しぶりです。ええもう、ホント久しぶり過ぎて何を話したら良いか分からない程です。まぁ取り合えず近況を報告すると、ある四文字熟語がそれに当てはまります。そう、その四文字熟語とは――・・・

――迷惑千万

意味、判りますよね？　「迷惑」は、やっかいなめにあって困ること。嫌な思いをすること。めんどう。「千万」は、この上もないこと。非常に。（ｂｙ　四文字熟語データーバンク）

自分の身に起きたことをアントワンヌ様やグエンさんに説明し、理解して貰ったのはつい先日。その後、長旅とは言わないが疲れているだろうから休んだらどうだ？　と進められ、かつての自室に引き篭もる。――そこまでは良かった。

その際、サイドテーブルに置いてある色つき水を飲んだのが不味かった。急な睡魔に襲われ、ベットに倒れこむことも出来ないままそこで意識が途絶えた。

そして現在――

「――やっぱり黒い御髪にはこの深紅（クリムゾン）のドレスが映えますわ。」

「いいえ、ちがいますッ！　なんと言ってもこの菫色（ブルーバイオレット）のドレスですッ！！」

「何を言ってるんですか2人とも！　カナン様にはこの藤紫色（ロイヤルブルー）のドレスですッ！！」

見た目、人間と呼んでも差し支えのないかしまし3人娘が、何故かあたしにドレスを着せようと躍起になっていた。――つうか、ここって一体どこよッ？！

１８話目（後書き）

意識を失っている間に・・・

19話目

ゴテゴテと所狭しと飾り付けられている室内の装飾品に、一様に眩暈を覚える。

目頭を押さえながらあたしは、取り合えず状況を把握するべくこの3人に話しかけた。そして、返ってきた答えに・・・

「あんたはギリシャ神話の冥王ハーデスかッ！！」

飲み物に細工をし、あたしをこの魔国へと強制連行した諸悪の根源に捲くし立てた。しかも細工した飲み物はなんと、魔国に生息する植物から摂取した物質らしく、幸いな事に後遺症は無いそうだ。うん。良かった良かった。ギリシャ神話だと1年のうち3分の1は冥府で暮らす事になってた・・・

「ハーデスってなんだ？」

「ハーデスってのは俺の居た世界の神話で、冥界の神の名前だ。確かペルセフォーネを騙して冥界に連れて来たんじゃなかったかな？　そんで――」

人の思考に割り入ったクソ兄貴が、馬鹿息子にギリシャ神話の説明をし始める。その説明に納得が謂ったかどうかは分からない。が、今はそんなことはどうでも良い。心底どうでも良い（ここ強調！！）

「なんであたしこんな格好しないとなんない訳ッ？！」

着せ替え人形よろしく、かしまし3人娘の手によってあら不思議、淑女の出来上がり。ってか淑女ってなに？　自分で言うのもなんだけど、あたしってば淑女からかなりかけ離れた性格してると思うけど。

１９話目（後書き）

急展開です！！

20話目

父さん母さん、目が痛いです。色取り取りの光沢のドレスに燕尾服？　タキシード？　詰襟の軍服？　みたいな服が光の公害・・もとい、ほぼ原色に近い光の光源を迷惑なほど放っているため、まるで突き刺さるように光が目に染みます。

クソ兄貴の妹（自分）が長いこと離れていたその兄と再会と、魔国に来たお祝いとして夜会が（つまりは歓迎会が）開かれるとの事。ハッキリ言って、えぇハッキリ言って！　声を大にしてまでもハッキリ言うがッ！！

――ものすごく迷惑なことこの上ないッ！！！

夜会用のドレスを着るために、かしまし3人娘の手によってコルセット等というものを着けられたが死ぬかと思った・・・。いやマジで、冗談抜きで圧死するかと思った。

コルセットは良く分からない物体で作られたものでサイドから紐を引っ張ることでそれが段々と形を変えるらしい。つまりは体を締め上げるのだが・・・

「駄目だめッ！　マジ死ぬからッ！　内臓潰れて死ぬからッ！！」

あたしの叫びに3人は仕方なしにコルセットを諦め、ドレスオンリーにしてくれた。が、そのドレスを決めるのにひと悶着を起こしたのがひとつ・・じゃなくてふたつ前の話しだ。そして今あたしは紫藤色（ロイヤルブルー）のドレス姿。

髪は可愛らしく纏められ真珠と銀の装飾品で飾られている。小粒のビジョンブラッドと金の小さな鎖で出来上がっているのネックレスとイヤリング。そしてブレスレットにアンクレット。

その上ヒールの高い靴をはいて完成したあたしの手を馬鹿息子（やべッ！　名前忘れたッ！！）が軽く掴みながら会場にドドンッ、と鎮座する王座に向かいながらを歩いていた。

21話目

「はー「キャーッ、なんて可愛いのッ！！　華南ちゃんって言ったかしら？！」

取りあえずアバドンに連れて込まれた手前、自己紹介をするべく言葉を紡ごうとした途端、目の前の憂いを含んだ魅惑的な女性（クソ兄貴の奥さん）の機関銃並みの口調とそれに付加する形の仕種に思わず腰が退ける。そしてその退けたあたしの腰にさり気無く手を廻し、アバドンがグイッと自身に引き寄せる。

「母上。叔母上が怯えてますよ？」

「え？　あらごめんなさいね？　あんまり可愛らしかったものだから。ついつい。」

ついついってなに？　ってか謝罪が疑問系ってどういう事よ。つうかお前もいい加減この手を離せ。

腰に廻してきたアバドンの手にあたしは＋αを付けながら（爪を立てながら）その甲を摘んだ。爪で思いっ切り、ギリリと効果音が付くんじゃないかという感じで。なのに全く変わらない。えぇ、表

情も態度も全く持って変わることないアバドンに、それならばと凶器と化したヒールで靴の上からその足を踏む。

お？　どうやらこれは堪えたようだ。

顔の表情は変わらなかったが、体が少しだけ動いた。

「・・・母上、どうやら叔母上はあまりこういう場所には慣れていない様子。少しこの場を離れてもよろしいでしょうか？」

「そう？　でも退場は諸侯にお披露目（紹介）が済んでからにしてもらえるかしら？」

「分かりました。ちなみに母上、その紹介は私が行っても構いませんか？」

「あら、なにか思うことでもあるのかしら？」

「ええ、まぁ。父上はどうか知りませんが、母上は間違いなく気に入ると思います。」

含み笑いを浮かべるアバドンに対し、なぜか死刑執行に向かう死

刑囚の心境に陥るのは何でだろう・・・あれか？　黒すぎる笑みを見た所為か？！　あぁ、なんか精神的に疲れてきた・・・

22話目

「――今夜は急な催しにもかかわらず、公爵、侯爵、伯爵、並びに他の爵位を有するその方たちに感謝する。よくぞ集まってくれた。」

朗々と声、高らかに宣言するはアバドン。そしてその隣に居るあたしに複数の視線が突き刺さって痛いです。しかも傷口をぐりぐりと広げられているような錯覚さえ覚えます。もちろんその視線が発する場所は綺麗どころのご婦人やご令嬢からで意味するものは当然、何この女？　見たいな・・・あ、また刺さった。

あまりの視線に若干離れようとするたび引き戻され、そのつど視線が突き刺さる。マジ勘弁してほしい。死ぬよ？　そのうち出血多量で死んじゃうよ？　あたし。ってかまぁ実際血が出てるわけではないが、心境的に死にます。

そんな現実非難をしていたあたしを引き戻したのは割れんばかりの会場の響（どよめ）き。それは四方八方から飛び交う怒声と黄色い悲鳴。っうかなんで黄色い悲鳴？

「本気ですかッ？！　アバドン様！！」

「なに考えてんですかアバドン様ッ！？　考え直して下さいッ！！」

「うふふ、いい考えだわアバドン。これで可愛い娘が出来るのねぇ。」

「いいか三度は言わぬ、良く聴くがよいッ！！　先ほど言ったと通りこの女性は父上の妹にして我が叔母上。性はシノノメ名はカナン。そしてッ！！」

アバドンが言葉尻を切りあたしを見る。薄くて形の良い唇がゆっくり弧を描き――あれ？　なんか寒気がするよ。いかん、いかん。どうやら出血し過ぎたようだ。このままでは死んでしまう。

「――俺の婚約者だ！！」

・・・訂正しよう。出血死ではなくショック死しそうだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4718q/

巻き込まれた人間の異世界生活

2011年10月13日11時12分発行